



# 和を好む心

—和の教育(二)—

倉橋惣三

一

子どもの自然から發達する、眞實なる和の性格が、必ずしも形式的に、完成的に、型どられるものでないことは、前に考究したところであるが(本誌前號)、もの感じ方、思ひ方として、和を好む心を養うことは、和の教育において大切な問題である。和を好むからとて、直にその生活が和に完成されるとは限らぬが、和を好む心を幼時から養われると否とは、將來の和の生活にとつて大きな關係がある。假りにも和の反對を好むような心のもちが主になつたら大變である。和の教育の第二要項として、この問題が重視せられなければならない。

和を好むことは、健全な神經の自然の趣味である。なごやかな春の日、母のなごやかな子守歌を聞きながら、なごやかにすやくと眠るのは嬰兒の神經の快感である。なごやかな幼稚園の庭に、友達とゆるやかに、手をつないで、なごやか

な輪を描くのは、幼兒の神經の満足である。すなわち、和を好む心を養う第一の基礎は、神經の健全を破らないことである。そのためには、全體の健康、特に消化機能の不調と、目鼻、耳、齒、咽喉、皮膚の慢性の刺衝が、氣のつかない影響をもつ。おとなでも、胃弱者に不平家が多く、虫齒にかんしやくが附きものであつたりする。平生の衛生としては、睡眠の不充分が氣むづかしやをつくる。皆、病的な神經がさせることである。病的な神經は和の平常に安んぜられないで、病的な刺激や興奮を要求し、異常を追求する。

和でないことに興味を感じるのも、そうした一種の異常である。和に關しての興味に種々の場合があるが、所謂、事を好み、争を好み、亂を好み、破調を好み、不秩序を好む。程度と質に違いはあつても、神經の變質的要求たるにおいて一つである。階級的がまんがんに神經をすりへらした昔の町人が、火事という面白がつて駆け出し、犬の喧嘩でも見物の垣をつくり、酒に神經を爛れさせた昔の浪人が、騷動と聞くと快

敵を叫び、鬭争というは何處へでも腕をまくつて飛びだした類も、その笑うべき好例とすることができよう。昔ばかりではない。今日でも、いせいがよさをうにみえて實は笑うべき例が少くないであろう。

## 一一

神経がほんとうに健全であれば、不和を好むということはない筈であるが、観念的にそうした趣味の嗜好が養われることがある。英雄主義とか専制主義とかいうものに對する、社會評價の誤つた觀念に養われると、人生觀にそんな傾向を植えつけられるのがそれである。昔のミリタリズムとか、ビニロークラチズム（官僚主義）とかも、屢々その悪影響を與えた。一つは平和主義に目を覆い、一つは權力主義に鼻を尖がらせて、顔の相好までも和を失つてくる。という、問題を好んで大きいところで取り上げたようだが、子どもに對する和の觀念教育にも、多くの同じ心配がある。その結果は實は却つておそるべきかも知れない。おとなでは、觀念で離れていることもあるが、子どもでは、性向に浸け込むからである。細心に警戒しなければならぬ。

意識的に、表から、そういう思想を吹き込むものは、今日無いとして、子どもに聽かせるおはなしの中に、そうした觀念のはいつているものはないか。これは綿密に検討すれば案外、少なくないかも知れない。軍國主義的や超國家主義の非國際的、非民主的な日本神話や國史ばなしは削除したとして

外國のはなしでも、北歐や南洋のものに、そういうものはありはしないか。勿論、そう／＼聖話集ばかりでなければならぬというのではないが、魔王譚や、武勇傳や、和を好む心に餘りにも反する禮讃が語られてはいないか。殊に、近來のニエースは、子どもの心に、どんな興味をそよめるものだろうか。現實は仕方がないとしても、社會時事ばなしとしてそんなニエースが子どもの前に語られてはいないか。困つたことですねえと附け加えられたにしても、子どもの社會觀に物騒な魅力を募らせられずにいないであろう。殊に、語るものゝ心に皮相なジャーナリスチックな感興でも湧いているに至つては、その影響はおそろしい。觀念そのもの、内容如何よりも、話手のその觀念への態度こそ、最も反省せられなければならぬのは、談話教育の常の注意であるが、こういう場合殊に反省を要する。

和を好む心を正面から養つてゆくは、なしを選ぶことは、遺憾ながら容易でない。殊にそういうはなしで、子どもの心を活き／＼と惹きつけることは凡手には容易でないかも知れない。無風靜穩な海を描くことは、波濤の海を描くよりはむづかしいと言われている如くである。話手を以て任ずる人の多くが、幼い聽き手の心を、はげしい感動や興味でゆすぶり動かす技巧の上手の多いなかに、われ／＼は、もの靜かな話し方の名人を探したい。そうした話し方こそ、平和のはなしをするに適するばかりでなく、その優れた話し方自身が、和を好む心の培いになつてゆく。話手の聲の靜かさ、調子の穩

かき、相手を促すような山もないなごやかな態度は、聴手の趣味を、おのづから、そういう方向に向ける。その反對に、面白いからといって、始終パッション（激情）に訴えられてゆくような話を聴かされると、その方向に導かれてゆく。子どもの食物は、味の餘りに濃厚なものでない方がいゝというのと同理である。無味枯淡といつた老成調の、子どもむきでないことは素よりであるが、強烈な興奮の連続も亦、子どもの、和の趣味を破壊する。社會運動などでアヂルという言葉が用いられるが、その場合、内容よりも口調や手振りでのアヂテーションが多い。そうして聴衆は激越の心（和の心の反對）を養われてゆくのである。はげしくなければつまらず、はげしくさえあれば嬉しがるような、狂氣じみた破調趣味の持主にされてゆくのである。

子どもに破調趣味を養う危険の多いものに、低級な漫畫や下品なジャズ性の音楽がある。漫畫は一概に否定すべきものでもなく、平坦な正調畫では感じさせることのできない辛らつな諷刺などには、奇想天外な構圖や筆致にならずにはいられないものもある。子どもの世界に、そうした深酷なものはない。りようもないが、子どもの世界なりに多少並みはづれの場合もあつて、子どもとしての漫畫もあり得る譯であるうけれど、漫畫でなければ感興が起らないようなことになつたら問題である。況や、そうした破調の畫風を、單にアクドイ興味として徒に弄してゆく低級なものにあつては、子どもの正調な趣味を傷めるだけである。低級な惡ふざけだけで、子ども

を笑わせようとする話し方と同罪である。邪氣はないかも知れないが、一種のアジである。

子どもの音楽に、流石にジャズはない。おとなの場合、所謂現代感覺として、ジャズにはジャズの存在の意義がないでもなからうが、子どもには、そんな必要はない。というよりも、或る意味では、子どもの原始的野性にはジャズ的な騒音があるとして、それは趣味と名づくべきものでもなく、音楽として與へらるべきものでもない。子どもたちが、チンドン屋の後ろについていきたがるからとて、チンドン屋を特に子どものために招聘すべきでもなからう。ところで、こんなことは言うまでもなく、特にジャズを選ぶ幼稚園も學校もないにまがつているが、調子はづれ、狂つたテンポの弾き方、歌い方、それに、こわれたピアノのへんな音などは、ジャズにもならないジャズのような影響を、識らず／＼の間に子ども心に與えずにいないであらう。

## 二二

以上、つまり、お話にしても、繪にしても、音楽にしても、その内容、その意味において和を好む心を養うようなものでありたいと共に、話し友、その聲、調子が大切であること、をいゝ、繪にしても、色・線・形の大切であることをいゝ、音楽にしても、音、曲節、テンポの大切であることをいゝ、すべて斯うしたところから、和を好む心の養われる微妙の影響のあることを考えたのである。

果してそうとすれば、斯うしたところの、特に更まつた教育の機會に限らず、或はそれ以上に、平常なんでもない間の子どもへの顔色、言葉づかい、それとない態度が、和を好む心の涵養に如何に微妙の影響——むしろ感化をもつかを考えさせられるのである。そして、それら平常無意識の間にあらわれるものは、その人の本來の心でなければならぬ。その人が和（調和）を好み、不和（不調和）を嫌う心の人でなければならぬ。これこそ最も大切なことがある。

#### 四

しかも更に、その人は、たゞに和を好む心をもつばかりでなく、和をつくる人でなければならぬ。和をつくるということにも種々の力も術も要することもあるが、その人の存在が、その周囲のふんいきを和やかにする人であることが、こゝでは先ず第一に望ましい條件である。その人がいると、なんとなく、その場が和やかになるといつた風の人があるが、その春光溫和の人柄が望ましいのである。山上の垂訓の一つの、「和平を求むる者」とあるのは、英譯の聖書では、ピースメーカーとなつており、たゞに和を求むるだけでなく、和をつくる者ということになるが、和を心から求めることなしに和をつくり出すことはあり得ない。力よりも術よりも、和の愛好がその本源であるのである。此の地上に和をつくる力や術としては、時に不和を諒き、又不和と闘わなければならぬこともあろう。しかし、それは、その處理の必要によつて

あつて、それは皆、和を求むる心の已み難きに出づるのである。和を求むるの已み難きは、單に和が必要からだとか、和が理想からだとかでなく、自ら和を好む心からでなくてはあり得ない。和を好む心の人のみが、和をつくり得るのであり、現實での對處の前に、その人の人柄に先づあるものである。その、和を好む心は、おのづから、事毎に、あらゆる場において、和を生む力とならずにいないであらう。その人は不和を思うにたえないのみならず、不和を見ることにもたえないからである。

#### 五

但し、茲に一つの問題は、和を好むということ、正しさを滅し、義を顧みないあいまいやごまかしを許してはならない點である。殊に、そういう態度を利己——自己の平安のために執る卑怯を許してはならぬ點である。正を責び、義を守る心は、これ亦、どこまでも、子どもに養われなくてはならぬ心であつて、それを忘れ、それを捨て、平然たる、便宜主義的妥協の安易性の習性などをつけてはならない。正のためには主張し、義のために立つという強固さを把持させることは極めて必要である。しかし、それが主張の自己満足のための主張、強固さの自己快感のための強固になつてはならないし、そういう主張と強固のあなたには、和を求むることを失わぬ和の愛好心が常になくてはならぬ。究極の點の和の實現のための正義というものは、子供（十四頁へつゞく）

斯う申し上げれば、敬ちやんが風邪を引く筋道はお分りになつたと思います。せめてランニングシャツで充分です。九月の太陽に當てゝ下さい。幼稚園でも之を續けて参ります。その他肝油を一と匙宛、お八つと一緒にのませることにいたしました。

では——もう一つ思ひ出したことがあります。之も一學期の或る日、子供たちをつれて近くの公園にいつたことがありました。そこには一寸した崖があつて、誰が始めたのか、子供たちはその崖を滑り始めました。次第に皆の子供が加つてどの子のお尻も泥で眞黒になつています。

處が敬ちやんと二三人の子供はじつと立つてそれを見ているのです。目は輝かせていますが滑らうとしません。私は二三回言葉で促してみましたが、何か躊つていましたので、私は手をひいて崖の上に登り、突落す様に滑らせました。敬ちやんはきやつきやつと笑いながら滑つてゆき、その後一二度は自分で滑りましたが、何か氣付いた様に止めて、今度はしきりとズボンについた泥を拂わうとしてゐるのです。

子供は泥だらけになるのが商賣ですのに。遊びが、いたづら、その生命ですのに、その生命の前には總てが無價値です。敬ちやんはその生命をどこかに置忘れたのだらうか、私はそんな風に考えました。

健康な生活のもととは清潔にあります。然しお行儀よくよござぬ様にしておくことではありません。出来るだけ全力をあけて遊べる様な被服を着せ、泥だらけ汗まみれに遊ばせる、

その遊ばせたあと始末をきちんとしてやるのが健康保育のねらいです。

全力をあけて遊ぶことの出来ない子供は、自然性格の發達にも、躰の發育に及んで来るでしょう。性格の弱い子供になりましょう。筋骨も軟い子供になりましょう。敬ちやんの弱いことの一つもそこにあると思われます。

お隣の子供が多少暴れん坊であつても、その子と遊ばせる様になさい。子供同士がよいのです。いぢめられ様が、たゞかれ様が、子供の爲には、おばあ様がお相手なさるより遙かによいことでしょう。幼稚園でも泣かない子供になるでしょう。躰も丈夫になるでしょう。

皆様が御歸京なされたら、幼稚園が始る前に是非御邪魔して、皆様ともよく御打合せいたし度う御座います。宜敷御取次の程お願い申し上げます。

(五頁より)にはまだむづかしいことであるが、心の方向としては、正義を愛する心と、和を好む心とは、決して矛盾するものではない。殊に教育の用意として、この、それ、重要な心の養成は常に考えられていられるものである。或は更にこまかく言えば、和を愛する心こそ眞に奥深いところに、又、最もひろくとした意味で、強くというよりも切實に養われなくてはならぬものであろう。事に當つて正義を守らなければならぬということよりも、常に求めて休むことない心といつていゝものであろう。